

異世界おもてなし局

主な登場人物

由良聡美
ゆらさとみ

異世界おもてなし局
管理官

氷川進
ひかわすすむ

異世界おもてなし局
管理官

萬福院正勝
まんぶくいんまさかつ

異世界おもてなし局
警備官

伊勢崎
いせさき

異世界おもてなし局
課長

橘将人
たちばなまさひと

中学三年生

三輪茜
みわあかね

中学三年生

カルロス

留学生

赤城太輔
あかぎたいすけ

漫画家

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・製品・事件
とは一切関係ありません。

目次

結	異世界倶楽部（後編）	魔王の休日	異世界倶楽部（前編）	知恵の化身	序
128	90	60	38	10	4

序

五人程度が入れる小さな会議室、赤城太輔の対面に座った児玉は時折、「ふーっ」とか「うーん」とか唸り声を上げながら、太輔が作った新作漫画の企画書に目を通していった。

十年以上漫画家人生を送ってきたが、何時までたっても編集の反応を待つのは慣れない。太輔はペットボトルの緑茶を何度も口につけ、児玉の様子を見つめていた。

数時間にも感じられた数分が経ち、児玉は資料から目を離した。

「良いと思いますよー、これで行きましよう」

随分と軽い緊張感の欠片もない編集者の一言で、太輔はようやく息を吐くことができた。

「それは良かった」

児玉は「はははっ」と笑った。「もっと自信を持ってくださいよー、赤城先生。今や我が出版社で一、二を争う売れっ子漫画家が考えた企画なんですからー」

「でも、少々ありきたりかな、と思っていた部分もあって」「まあ、そうですねー」児玉はこくこくと頷いた。「今のご時世、異世界転生モノはこれでもかかっていうほど氾濫してい

るジャンルですからー」

「だろ。十年近く異世界系だけ描いてると、そろそろ他の分野にも挑戦したほうが……って思う時もあるよ」

太輔は異世界系漫画家としてデビューを果たし、これまでの作品はすべて、なんらかの形で異世界が絡んでくるし、今回の企画も異世界転生を扱っている。もはや太輔にとつて、異世界系はアイデンティティであり、それを描くことこそが使命だとすら思っている。しかしその一方で、いつまでこの作風で食いつないでいけるかと不安がないでもなかった。

「他のみなさんも同じことで悩んでますよー。でも自分に言わせれば、悩んでいるうちが華ですって。常に読者へ新しいものを届けたい、作家なら誰しもが思うことです。それを忘れてしまった漫画家の作品なんてつまらないですから。だからいっぱい悩みましようー」

と、若者を諭す老賢人のようなことを語る児玉は二十代半ば、太輔より一回りも年下だ。

「君に言われても、説得力がないな」

「自分の言葉じゃなくて、編集長からの受け売りですよー。それはとにかく、赤城先生はこの企画をありきたりなんて言いますがそれは違います。こういうのを王道って言うんです。

最近の人たち、特に自分たちの雑誌の読者は王道こそ求めているんですからー。それに先生の作風は展開が王道であるからこそ活きてくると自分も編集長も思ってます。先生が描く異世界はとても繊細で、本当にその世界に來たんじやないかって錯覚するほど物語に強いリアリティを与えています。赤城先生以外にはとても真似できません」

多少盛られているだろうが、編集者から面と向かって褒められたことに、太輔は恥ずかしくなって視線を逸らした。

「そ、そんなもんかね？」

「そんなもんですよー。だから先生、自信を持ってください。目指すは単行本総売上部数、一千万越えです！」

「……随分無茶な目標だな」

「今の赤城先生の実力と人気なら決して不可能じゃありません。打倒ワ○ピース！ ジャン○なんてなんぼのもんじやい！ っていう気迫が必要なんです」

兎玉の勢いには当惑したものの、期待をかけられたからにはできるだけ応えたいと、太輔は強く思った。

「ということで赤城先生、早速制作に取りかかりましょう。前作の連載が終わって半年、読者は先生の新作を、首を長くして待っているんですから」

「わかつてる。心と体の充電も十分できたし、頑張るさ」

「お願いします。……それで先生。制作を始める前に、一つアドバイスを言うかお願いと言うか」

兎玉の口調が急に硬くなったので、太輔も姿勢を正した。

「なんですか？」

「アシスタントのことです」

「またその話か」太輔は唇をかんだ。

「先生の作品は文句のつけようなく面白いんですが、筆が遅いのもう少しなんとかなりませんか。あれだけの分量、一人で全部描くのはさすがに大変でしょう。もしツテがないなら自分からも紹介できます」

太輔はこれまでずっと一人で漫画を描いてきた。兎玉の言う通り大変な作業で、締め切り前は徹夜が何日も続くことはざらだ。出版社側は原稿を落とすリスクかそれとも健康を気に遣ってか（後者の方だと信じたい）、何度かアシスタントを雇うように要請してきた。もちろん、アシスタントを雇う金がないわけではないのだが……。

「申し出はありがたいけど、俺は一人で仕事したいんだ」太輔はこれまでと同じ理由で断った。

「大丈夫ですか、本当に？」

「そのために半年も休んだんだ。話はそれだけ？」

「あつ、いえ……。あともう一つだけ」

腑に落ちないと言いたげな表情を浮かべる児玉だったが、

アシスタントの話題にはこれ以上触れず、A2サイズの分厚い封筒を机の上に置いた。

「読者から先生宛のハガキです」

児玉が封筒を開けると、中から滝のように雑誌の読者カードがあふれ出てきた。

「こんなに！」

半年も連載をしていないのに、未だ太輔宛へのメッセージがこれだけ届くことに驚いた。

「ちよつと見ていいか？」

「もちろんです。みんな先生に向けて書かれたものですから」

テーブルに広げられたハガキを一枚一枚拾い上げ、メッセージ欄に目を通した。作家を応援する言葉、次回作を期待する言葉で満ちていた。太輔も他の作家に漏れずSNSでファンとの交流を心がけていたが、それでもわざわざハガキで送ってくれることに、読者の並々ならぬ熱量を感じて特別嬉しかった。漫画家が続けてきて良かった、と心底思える瞬間だ。

ハガキを読み進め、太輔の目頭もじんわりと熱くなってきた頃、「おおつ、これは」と、児玉の驚嘆した声がした。

「先生、見てください。なかなか面白いことが書いてありますよー」

児玉が手渡してきたハガキに太輔は目を通した。メッセージ欄には太輔の大ファンであること、前作を毎号楽しみにしていたことなどが煽情的に書かれていて、なかなかの文才を感じたが、締めめの文を見て、太輔の息が止まった。

「……先生の素晴らしい異世界はとても想像だけで描いたものとは思えません。ズバリお訊きします。赤城先生は異世界から来た人ですよね！ 他の人には隠せても私にはお見通しです。ぜひ詳しい話を聞かせてください」

この異世界とは、こことは別の世界、つまり太輔の漫画にも登場するような、剣と魔法が支配する世界のことだろう。

——こ、これは……。

「先生、どうしましたか？」メッセージ欄をじつと見つめる太輔に児玉が声をかけてきた。「顔の汗がすごいですよ。エアコン強くしますか？ 今日暑いですよー」

「あつ、いや。大丈夫」太輔ははっと顔を上げると、額の汗を手で拭いた。「それより、このハガキは……？」

読者情報欄を見ると、送り主は太輔の自宅からほど近い地

区に住む、女子中学生からのようだ。

「面白いですよ。先生が異世界の人間だなんて」

太輔は喉の渴きを覚えて緑茶を一気に飲み干した。「どうして、こんなことを？」

「さっきも自分が言った通り、先生の異世界の描写がそれだけ真に迫ってるってことじゃないですか。漫画を見た感度の高い中学生の突飛な想像力を刺激したってわけです。先生だって経験あるでしょう」

「そう……だな」

と言い、太輔は席を立った。

「あっ、先生、どうしたんですか急に。ハガキはもういいんですか？」

「あっ、ああ……。残りは自宅に送つていってくれ」

「わかりました。それで、もし時間があれば企画も固まったことだし、帰る前に景気づけに……どうですか？」

ジョッキをおおる仕草をする兎玉と、ブラインドの隙間から太陽光が元氣よく流れ込んでくる窓を見て、太輔は首を振った。

「今から取材に行かなくちゃならないんだ」

会議室を辞去し、出版社のビルを出た太輔は、すぐ目の前

にある地下鉄の駅へ向かった。乗客がまばらな電車で揺られている間、先ほどのハガキがずっと太輔の脳裏にちらついていた。

「まさかね」と、電車の中で太輔は何度も呟いた。

自宅最寄りの駅で降りた太輔は、近くのコンビニに寄り、ペットボトル、おにぎり、菓子などを買い込んだ。パンパンに膨れ上がったビニル袋を提げて店を出たところで、スマホが震えだした。電話に出ると、通話口の奥からいかにも電話向けに取り繕った女性の高い声が聞こえてきた。

『あっ、赤城さん。まだですか？ こちらはもう着きましたけど』

「今向かってる。あと十分くらいでそちらに着くと思う」

『わかりました、じゃあ、お待ちしてます』

電話を切ると、赤城は早足で歩き始めた。

編集者には取材と嘘を言い、今から自宅で彼女と二人甘いひと時を……、ということでは決してない。不惑を前にして、太輔の結婚願望は高まるどころかむしろ落ちていく一方だ。宣告通り、今から取材であり、電話先の彼女は取材をサポートしてくれる仕事上の付き合いに過ぎない。もちろん彼女だ

って太輔のことを同じように考えているだろう。

太輔は自宅兼仕事場へ続く道路を通り過ぎ、とある神社にたどり着いた。知名度は皆無に等しく、地元の人間ですら初詣以外で参拝することは滅多にない寂れた神社だが、ここが太輔の目的地だった。二十段ほどの石階段を登ると、右手に二階建てのこぢんまりとした住宅と軽トラックがあり、左手には小さな森と言えるほどの木々が繁茂し、砂利道の先にはいつ壊れてもおかしくないような古い社殿が建っている。そして、社殿の手前には、所々黒く煤けた石の鳥居があり、そこに白いブラウスに黒いパンツスーツを着た二十代中頃の女性が立っていた。髪はショートカットで肌も少し焼けている。スーツよりもジャージーが似合うスポーツ選手のような印象を受ける。

彼女が先ほどの電話の主だ。

太輔は女性に向かって手を振った。「悪い、少し遅れた」

「いえ、大丈夫です。でもこんなところにずっと立っていたら熱中症で倒れちゃいますし、さっそく始めましょうか」

電話の時よりもずっと低い声で女性は言う、肩からシヨルダーバッグを下ろした。そして、中から取り出したのは大幣だった。

「じゃあ、始めますよ」

女性は太輔の目の前で大幣を左右に大きく振り始めた。シヨルダーバッグと紙の擦れる音が静かな神社の境内にこだまする。神社に大幣、しかしそれを振っているのは神主でも巫女でもなくスーツ姿の現代的な女性。太輔は何度もこの光景を見ているが、いつも違和を感じてしまう。

しかし、漫画の取材へ行くためにはこれが必要なのだ。

ふと、太輔の脳裏に再び、読者ハガキの言葉が浮かんだ。

——異世界から来た人……か。

もちろん、太輔は異世界から来た人間ではない。この世界で生まれ育った、ただの漫画家だ。いや、ただの漫画家というには少々語弊がある。それなりに成功した漫画家であり、そして……。

大幣を振っていた女性が話しかけてきた。「今回は何日間の予定ですか？」

「三日ほど。連載が始まるからあまり時間はないけど、できるだけ色々見て回るつもりでいる。土産を何か買ってこようか？」

「美味しいお菓子でもあればみんな喜ぶんですけど。でもあつちの人たちってわたしたちとずいぶん味覚が違うから」

「だからこういうのが喜ばれるのさ」太輔はコンビニの袋を持ち上げてみせた。

「そうですね……。はい、完成しました」

先ほどまで何もなかった太輔の目の前に、今は大人の背丈ほどの大きさの光の渦が現れていた。

この光の渦の名前はトリイと言い、こちらの世界と異世界を繋ぐポータルのようなものだ。

もちろん、ここでいう異世界とは、科学技術よりも魔術が発達した世界や、人間、獣人、妖精、魔族などが共存する、国連の人権委員会も羨むほどの多様性に満ちた世界、人間の身長をはるかに超える巨大怪獣が跋扈するワイルドライフな世界など、ここではない別の世界のことだ。

太輔はこの世界の住人だ。しかし、異世界の存在を知り、異世界を旅し、異世界を描く漫画家なのだ。

そして……、

「じゃあ、お気をつけて」

と、手を振って太輔を見送る彼女こそ、この世界と異世界の橋渡しを担う存在、異世界おもてなし局の管理官である。

知恵の化身

1

「あー、暑い」

由良聡美は事務室に戻ってくるなり、自席のペン立てに刺さっていたうちわで、パタパタと自分の顔や首を仰ぎ始めた。

「信じられますか、三十七度ですよ。三十七度。こんな日に外出しなきゃならないなんて拷問に等しいですよ。今年は冷夏っていう予報はどこへいつちやっただしょうね。あー暑い暑い」

聡美の隣の席にいた氷川進が、ノートPCの画面に目を向けたまま舌打ちした。

「帰ってくるなりうるさいな、お前は誰に向かって話しているんだ？」

聡美は氷川の横顔を見据えて答えた。「もちろん、わたしのOJT担当であらせられる氷川先輩に帰社報告をしているわけですよ」

「だったら、そんな情報は要らない。夏は暑いに決まっているだろ」

体感温度を一気に十度も下げてくるような冷たい口調で答える氷川に対して、聡美はめげずに返した。

「そりゃそうですけど、わたしは午前中からヒートアイランド現象で灼熱地獄と化した東京砂漠を歩き回った末、部活終わりの中学生たちがこった返すサウナのような地下鉄にすし詰めされたんですよ。後輩の苦労を少しは労ってください」

「条件はみな同じだ」

聡美は頬をぷうと膨らませた。「そりゃ先輩はいいですよ、ずっとエアコンの効いた事務所にいたんですから」

「俺もちようど外から戻ったばかりだ」

と答えた、クールビズ期間にもかかわらずネクタイをしつかりと締め黒ジャケットを羽織る氷川の横顔には、汗粒一つ見えなかった。

氷川に口論を仕掛けたのがそもその間違いだっただの。

聡美は降参して、小さくため息をついた。

「さすが、完全無欠にして国土無双、我らイカモチ局の将来を担う絶対的エースは格が違います」

それまでキーボードを休みなく叩いていた氷川の両手が止まった。「ずいぶん棘のある言い方だな？」

「そんなことないですよ。わたしは先輩のことを、海よりも

深く山よりも高く尊敬しているんですから。ただ時々、もう少し優しくしてほしいなあと思っただけです」

「由良のそういう素直なところは、俺も見習いたいな」

皮肉とも本気とも取れるような口調で言っただけで、ようやく氷川はPCから視線を上げると、かけていたメガネの位置を整えつつ、聡美を見た。

「そんなことより、早く本題に入れ。何かトラブルでもあったのか？」

楽しい(?) 雑談は終わり。聡美は姿勢を正して氷川に報告を始めた。

「問題は何もありませんでした。赤城さんも無事に異世界へ送り届けました」

異世界おもてなし局——通称イカモチ局、これが由良聡美や氷川進たちが所属する組織の名前だ。そのミッションはこの世界と異世界との円滑な橋渡しである。

一般には、異世界とはアニメや漫画の中にしか存在しない空想の産物だと思われている。

しかし、異世界は実在する……しかも無数に。

太古の昔より限られた者のみがある事実を知り、歴史の影

で異世界と様々な交流がなされてきた。その一端が神話やおとぎ話となって本来の意味を失った形で残されている。例えば、東洋の妖怪や西洋の悪魔の正体は異世界からの来界者であり、スフィンクスやストーンヘンジなどは異世界からの技術供与のおかげで建築された。

そして、異世界との交流は決して過去の話ではなく現在まで脈々と続いている。異世界おもてなし局も、その流れの中で設立されたものだ。

イカモチ局の活動は多岐にわたるが、聡美や氷川が所属する管理課は主に、異世界からの訪問者をもてなし、彼ら彼らがこの世界で果たしたい目的をスムーズに実現できるように支援することや、こちらの世界で暮らす人々が別の異世界へ行く時の送迎などであり、聡美が漫画家の赤城を異世界に送ったことも仕事の一環だ。

ただし、誰でも異世界に行けるわけではない。異世界とそれらに関する組織は社会に不要な不安をもたらすという理由で、一般には秘匿されている。赤城は異世界の存在を知る数少ない人間の一人だ。また、異世界は国の上層部も把握しており、イカモチ局はれっきとした外務省の関連機関である。

ちなみに、一昔前までは『人界管理局』などといういかにも

お役所らしい硬い名前だったが、もっと親しみが持てるように、という上位通達により今の名前に変わった。入局時にこの話を初めて聞かされた聡美は幹部たちの面前で、「非公開組織なのに親しみも何もないんじゃない？」と、思わず口走ってしまい、非常に苦い顔をされた思い出がある。

イカモテ局に就職して聡美は二年目。まだまだ駆け出しだ。そんな彼女にとってOJT担当の氷川は、仕事への要求は厳しいし、超がつくほどの真面目で堅苦しさもあるが、とても頼れる先輩であった。

報告に対する氷川の細かな質問に聡美が答えていると、事務室の扉が勢いよく開き、課長の伊勢崎があえて注目を浴びるためと思えるほどの大声を上げながら入ってきた。

「いやあ、暑い暑い。信じられん暑さだなあ。今年こそは冷夏じゃなかったのか」

事務室内にいた局員たちは無視するか無言で軽く会釈する中、氷川だけは「おつかれさまです」とはっきりとした声で答えた。

伊勢崎は嬉しそうに目尻を垂らして氷川と聡美を見た。

「おっ、氷川くん、OJTやっとなるな。結構結構。由良くんも先輩を見習って、早く一人前の管理官になってくれよ」

「あつ……、はい。課長のようにはなら……」

ないように気をつけます、と聡美は言いかけて咄嗟に口を閉じた。伊勢崎は口先だけで頼りにならないと、部下たちからはもっぱら噂されているのだ。

「私が、なんだ？」

首をかしげる伊勢崎に向かって聡美は愛想笑いを浮かべた。

「か……課長に認められるように頑張りたいって……」

「ああ、頑張ってくれ」伊勢崎は満足そうに頷いた。

ほっと聡美は胸をなでおろした。思ったことがすぐ口に出してしまう。悪い癖だ。

それはさておき、今は報告の続きを……、聡美が氷川の方へ視線を戻そうとした時、自席に座った伊勢崎が改まった口調で氷川を呼んだ。

「ところで氷川くん。ちょっと良いかな」

すぐに氷川は立ち上がると、「少し待ってろ」と聡美に言い残して、伊勢崎の席へ向かった。

しばらくの間、課長席を挟んで二人が何やら言葉を交わしていたが、突然、氷川が聡美に向かって手招きしてきた。

聡美は自分の鼻先を指差して問うた。「わたしですか？」

「他に誰がいるんだ？」

と、額に皺を寄せた伊勢崎に言われてしまい、仕方なく聡美も課長席へ向かった。課長と先輩から呼び出される……、良い話ではあるまい、ということは短い社会人経験の中で、すでに聡美は身をもって理解していた。

「何でしょう？」聡美は恐る恐る伊勢崎に訊ねた。

「実は今、異世界から非常にという言葉では言い表せないほどとてつもなく高名な方が来界されているんだが、その方のおもてなしを氷川くんにお願したんだ」

「はあ。でもずいぶん急な話ですね。偉い人が来るんだったら、普通はもつと前から準備しておくものなんじゃ？」

そもその話として、どうして異世界から人がやってくるのか？理由は様々だ。要人との政治的交渉や世界を超えた商売、スキルを活かして人生の一発逆転に挑戦、ただ単に観光ということもある。いずれにせよ、事前にイカモテ局に連絡があり、移動手段や警備の手配から宿泊施設と食事の確保まで、予め準備しておくのが基本だ。

聡美の質問に伊勢崎が答えた。「もちろん準備はしておいた。本来の担当は南くんだったんだが、彼のお子さんが急に熱を出して病院へ連れて行く必要があるんだ」

「なら、仕方ないですね」

と、自身にも最近子どもが生まれた氷川は言った。彼は一見とつきにくくて、実性格もとつきにくいのだが、なんと学生結婚している。一体どうやって知り合ったの？プロポーズの言葉は？そもそも結婚式に呼ぶ友人は何人いたの？疑問がとめどもなく湧き出してくる。聡美にとっての氷川七不思議の一つだ。

「でもどうして先輩に？ただでさえたくさんのお仕事を抱えているんですよ」

聡美が仕事机に座る同僚たちへ視線を向けると、彼ら彼女らは一斉に俯いてしまった。

「由良くんの言い分ももつともだ。でも相手が相手だからな。些細なミスも許されないような状況だから、南くんの他には氷川くんには頼めないんだ」

聡美が氷川の顔を覗き見ると、すでに彼の腹は決まっているようだ。しかし、氷川はエースと称えられるのに相応しく、普通の人から見たら目が回りそうなほどの仕事を既に任されている。深夜残業が続く日も珍しくなく、愛する妻の手料理の代わりにコンビニ弁当が夜食となり、可愛い子どもたちの面倒をみる代わりに不出来で生意気な後輩の面倒をみているのだ。そんな氷川に対して伊勢崎は更に厄介な仕事を押しつ

けようとしている。課長はもつと部下を勞つてやるべきだし、先輩だってもつと自分の利益を主張すべきだ。

「課長、先輩だけに押しつけるなんてダメですよ。優秀な人だけに仕事を振っているから、業務が偏つて不公平が生まれるんです。見てください先輩の前髪を。最近白髪が目立ち始めていますから」

「由良……」と渋面を作る氷川に対して、順調に前髪が失われつつある伊勢崎は一瞬だけ恨めしそうな眼差しを向けたが、すぐに聡美へ視線を戻すと、相手の振り込みを確信していた雀士のように、敵かに言った。

「まさにその言葉を待っていた」

「へっ？」聡美はダブルリーチに対して一発で振り込んでしまった雀士よろしく、間の抜けた声を発してしまった。

「氷川くんから提案があつてな。今回の仕事にOJTとして由良くんも同行させたい、と」

「えっ！」

「私としては、今回の仕事の重要性を考えると、氷川くん一人で仕事に専念して欲しかったんだが……、由良くんもやる気なら話は別だ」

「ええっ、ええっ！ つてことは……」

「このレベルの仕事は最近少ないから、由良にとつては良い経験になると思う」

氷川はいつも通りの真面目な表情で言った。

「良かったな由良くん。部下思いの先輩に恵まれて。しつかり勉強してこい」

伊勢崎は孫を見守るおじいちゃんのような目で聡美を見た。

「そ、そんな……」

聡美自身も残業が確定してしまった。口は災いの元とはこのことか。

2

イカモチ局の事務所にある小さな応接室、部屋に入るなり聡美は質素なテーブルの奥に座っていた少年に謝った。

「遅れてごめんなさい」

「大丈夫です」

少年はそう答えてから、驚いたように少し目を開いた。

「管理官さん、体調悪そうですね。大丈夫ですか？」

残業確定、夕飯はコンビニ弁当、という憂鬱な気持ちでモロに顔に出ていたようだ。聡美は慌てて表情筋を引き締めた。

「大丈夫。カルロスくんこそ、暑い中こんなところまで来て大変だったでしょうに」

「そんなことないです。暑いのは慣れてますから」

と言って、聡美の前に座るカルロス少年は微笑んでみせた。

体格は標準的な中学三年生より少し背が高いくらいで、どこにでもいる普通の海外留学生にしか見えない。しかし、これは仮の姿。カルロスの正体は異世界人、しかも魔法という異世界ではありふれているが聡美の世界にはまったく存在しない『普通じゃない技術』によって変装していて、真の姿は惚れ惚れするほど美しい白銀色の毛並みを持った誇り高き狼人間、しかも、さる獣人王国の王子様ときたものだ。

異世界からの訪問者の滞在期間は、ほとんどが数時間から数日という短さだが、カルロスはこちらの世界に来てもう三ヶ月が経とうとしていた。というのも、彼の来界目的は、姿と身分を隠し、こちらの世界の人々の中に混じって暮らすこと、つまり異世界留学だ。これは、代々の次期国王が行うべきカルロスの国の伝統だという。異世界人の生活を支援することが仕事の一つであるイカモテ局は、長期滞在する異世界人とも定期的に面談を行い様々な相談ののっている。カルロスは聡美が初めて単独で任されたクライアントだった。

聡美はカルロスにいくつか質問しながら、彼の健康状態をチェックする。人によっては空気が食べ物が合わず体調を崩してしまうことがある。そこは海外旅行と同じだ。幸い、カルロスの体調は良好だった。

生活していく上で困っていること不便に感じていることはないかなど、順に訊ねていくが、カルロスは「特にない」と繰り返した。

一通りの質問を終えたあと、テーブルに置いたスマホの画面へ何度も視線を向けるカルロスの仕草に気づいた。

「どうしたの？」

「あつ、ごめんなさい。SNSをチェックしてみました」

カルロスはスマホをひっくり返して画面を下に向けた。

「それにしてもだいたいぶこつちに馴染んだみたいだね。最初はスマホ一つまともに使えなかったのに」

彼ははにかんだ。「管理官さんがいっぱい教えてくれたから。いつもありがとうございます」

お礼を言われて、聡美も少し頬が熱くなるのを感じた。

「わたしのことを感謝してくれるのはカルロスくんだけね。

先輩は厳しいし、課長の辞書の中にも人をおだてるはあっても、感謝するって言葉はなさそうだし」

「管理官って仕事は大変なんですね」

「ほんと、大変。万年人手不足なくせに仕事だけは毎日大量に発生するし、こちらの常識が通じない人たちと会うことも多いからストレスも溜まるし。それに何より、他の人にバレちゃいけないっていうプレッシャーもあるから……って、こんな愚痴、カルロスくんの前で言ってもしょうがないか」

聡美の仕事を知る者はイカモテ局の同僚を除けば、昔、同じくイカモテ局（当時はまだ入界管理局）で働いていた父親のみ。高校や大学の友人と会った時も、仕事の悩みや愚痴をこぼしてストレス発散することができない。その反動か、聡美の仕事を知っている人を前にすると、相手がたとえ子どもであってもついつい舌が滑らかになると、相談にのるべき管理官が逆に愚痴など言ってしまう……、聡美は毎度のごとく反省した。

一方カルロスは、聡美の決まり悪そうな表情を見てクスリと笑った。

「いいですよ、僕は愚痴も含めて管理官さんと色々話できるのが楽しいですから」

本当によくできた子だ、さすが将来国を背負って立つ王子様、向こうの方が大人に見えてしまう。聡美は感心すると同

時にますます己を恥じ入った。

「わたしのことはいいから。それよりも今はカルロスくんの話聞かせて。こっちの世界に来てそろそろ三ヶ月ほど経つけど、学校の方はどう？」

「えっと……」

これまで歯切れよく答えていたカルロスの口が固まってしまった。

彼の真意は明らかだった。異世界留学の一環として、カルロスは近くの中学校に通っているが、そこでの生活がうまくいっていないようだ。カルロスを担当することになった時、学校生活は特に注意しろ、と氷川から助言をもらっていたが、その言葉は正しかったようだ。

「勉強が難しいの？」

カルロスは首を左右に振って否定した。

「先生と合わない、とか？」

再び否定。

「じゃあ、クラスメートの問題？」

反応がなかった。

「もしかして……、いじめられてる、とか？」

しばしの沈黙のあと、カルロスは重い口を開いた。

「違います。下駄箱の靴がなくなっているとか、机に一輪挿しの花瓶が置かれていたりとか、体育館裏に呼び出されて、下駄を履いた番長に蹴り飛ばされるとかはないです」

「一部、妙に古臭い話が混じってるけど……。いじめでもないってことは、他に何？」

「それは……」カルロスはためらいがちに言った。「友だちが……いなくて」

ここまで話して、聡美はふと気づいた。「あれ？ でも転入した直後は、いろんな人が喋りに来てくれて、遊びにも誘われて、毎日が楽しいって言ってなかったっけ？」

「最初はそうでした。でも最近は誰も僕のことを相手にしてくれないんです。でも、嫌われてるってわけでもなさそうなんです。ただ前みたいに話しかけられることもなくて……。結局、友だちと呼べるような子がいないんです」

「なるほど」聡美は腕組みした。

学生の頃は、気づけば友だちに周りを囲まれていた聡美にとって、カルロスの状況は今ひとつピンとこなかった。

カルロスとは面談で何度も話しているが、普通に意思疎通できるし、人付き合いが致命的に苦手というわけでもない。

しかし、せっかく異世界に来たのに環境に馴染めず孤立して

しまう来界者もいると聞く。今度氷川に相談してみよう、聡美は手帳に書きつけた。

「わかった、すぐに解決策を教えるのは難しいけど、こっちでも何かいい方法がないか考えてみる」

「ごめんなさい……」カルロスは肩をぎゅつと縮めた。

「謝る話じゃないよ、カルロスくんをサポートするのがわたしの仕事だから。学校以外のことでも何か困ったことがあったらなんでも相談して。緊急の時は遠慮なく電話してくれていいからね」

「はい、ありがとうございます」

その後、いくつか追加の確認をして、面談は終了した。カルロスが部屋を出る時、聡美はいつもの注意事項を伝えた。

「何度も言っていることだけど、自分の身分、それに異世界のことには誰にも知られないように気をつけて。もし正体がバレたら、いろいろ面倒なことになっちゃうから」

カルロスは小さく頷き、

「わかっています」

と、呟くように答えた。

地下鉄の駅を出た瞬間目に飛び込んできた、夕闇を背景に季節外れのクリスマスツリーのように煌々と輝く超高層ホテルに、聡美は立ち眩みを覚えた。さすがは都心でも一、二を争う最高級ホテル。見た目だけで聡美のような小市民を寄せつけない威圧感があった。

臨時で飛び込んできた今回の仕事のクライアントはこのホテルに滞在しているという。来界には多大なお金がかかる。多くの来界者は少しでも節約しようと、ビジネスホテルや民泊を使用することがほとんどだというのに……、相当な富豪のようだ。

ブラウスやパンツに埃が付着していないことを確認してから、高級という名の圧力に屈しないよう足に力を入れて歩き出した。しかし、前庭に植えられた木々の間から、ホテルのエントランスが見えた時、聡美は更に驚愕した。警備服を着た物々しい雰囲気の人たちで埋め尽くされていたのだ。これまで聡美が経験した仕事といえば、ほとんどが管理官一人で対応、警備員が随行したとしても二、三人というのが一般的だ。しかし、ここはどうだろう、猫一匹入り込む余地がない。

たとえ大国の大統領や世界の歌姫が来日してもここまでの警備体制にはならないだろう。

エントランス前で嘔然とする聡美に向かって、警備員の群れの中から一人の男が近づいてきた。分厚い胸板、よく整えられた顎髭とは対照的に産毛一本見当たらない頭部、そして、ダークスーツに真つ黒なサングラス……、とてもカタギの人間には見えない。しかし、彼もイカモテ局の一員で、名前は萬福院正勝。今回の警備面の担当責任者だ。

「待ってたよ、聡美ちゃん！」

と言いながら、萬福院は手を振ってきた。見た目と違わずドスの効いた声だが、実際は気さくな人だ。聡美が初めて萬福院と出会った時、あまりのギャップの大きさに、名状しがたい恐怖を感じて思わず泣きそうになったが、今はさすがに慣れた。

「萬福院さん、お疲れさまです」

「聡美ちゃんこそ。大変だね、こんな面倒な仕事に関わることになっちゃって。進のやつはもう来てる。案内するよ」

萬福院と一緒に聡美はホテルのロビーに入った。絢爛豪華な内装とはまったく不釣り合いな野暮ったい格好（良くいえば、機能的重視な格好）をした警備員たちがここでも所狭し

と張りついていた。

聡美は一步前を行く萬福院に声をかけた。「すごい警備の数ですね」

「まあね。僕もこの数の面倒を見るのは初めてだ。警備会社の連中も、こんなに人集めて一体何を護るのかって、不思議に思ってるだろうな」

警備員のうち、イカモテ局員は萬福院を含め数名で、残り是一般の警備会社から派遣されてきた普通の人々だ。彼らは自分たちの護衛対象が異世界から来た存在だとはつゆほども思っていないだろう。

エレベーターのボタンを押しながら萬福院は続けた。「それでも、上の連中はまだ警備が甘いんじゃないかって不安を口にしていたよ」

「本当ですか？ 一体、今回のクライアントって何者？」

「あれ？ 聡美ちゃん知らないの？」

「この仕事、今さっき言いつけられたばかりで、資料もほとんど目が通せてないんですよ」

聡美と萬福院はエレベーターに乗り込んだ。萬福院は客室の中でもっとも最上階のボタンを押すと、エレベーターは静かに上昇を始めた。

「準備はしっかりしておけて、また進にどやされるよ」

「しょうがないじゃないですか。わたしにはこれ以外にもやらなきゃいけない仕事がたくさんあるんですから」

「そりゃそうだ」萬福院は肩をすくめた。「でも、あいつの下にいて、聡美ちゃんも苦勞するね。進は自分が超人的スペックだってことを棚に上げて、他人にも同じことを要求してくるんだから。僕も学生時代は苦勞した」

氷川と萬福院は高校、大学の同級生だという。二人はずいぶん性格が異なるにもかかわらずとても仲が良い。ちなみに氷川の美人妻とも同級生で学生時代は三人でよくつるんでいたと、前に萬福院から聞かされたことがある。聡美が想像する以上に彼らの関係は複雑なのかもしれない。

「そんなことより」聡美は逸れつつある話を元に戻した。

「今回のクライアントってどういう人なんですか？」

「ああそうだった、クライアントね」萬福院は答えた。「みんなは『知恵の化身』と呼んでいる」

「『知恵の化身』？」

「若い頃からありとあらゆる異世界を渡り歩いて膨大な知識を習得、そしてとうとう世界の真理にたどり着いたって言われているんだ。つまり全異世界の中で最も賢いっていうわけ

さ。だから『知恵の化身』」

「本名は？」

「さあ」萬福院は首を振った。「みんな恐れ多くて名前なんかで呼べやしないから。案内、クライアント自身も忘れちゃったんじゃないかな」

「はあ……。で、その『知恵の化身』様は何しにこっちの世界へ来たんですか？」

「無限とも言える知恵と真理の一端を授けに来たんだって。」

『知恵の化身』はあらゆる異世界から来界を渴望されていて誘致合戦が激しいそうだけど、世界中の名だたる宗教家や哲学者や政治家たちが三顧の礼を尽くしてようやく今回、僕たちの世界への来界が実現したらしい。南アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア……地球をぐるっと一回りして、最後は日本、というわけさ」

聡美もようやく事の重大さがわかり始めた。異世界を巡って世界の真理を伝える『知恵の化身』。その『知恵の化身』にもしもの事があれば、全異世界からの大バッシングは免れず、下手すれば多くの異世界を巻き込んだ紛争にすら発展しかねない。上層部は万全を期したくなるわけだ。

一つのミスが即命取りになりかねない、とんでもない案件

に巻き込まれてしまった。

「あの、萬福院さん。……わたし帰って良いですか？」

「もう遅いよ」

チンツと短く音がして、エレベーターの扉が開いた。

4

到着フロアの廊下にも、警備員が儀仗兵よろしくずらりと並んでいたが、一番奥の部屋の前には更なる人だかりができていて、その中に氷川もいた。

「遅かったな、やっと来たか」

「カルロスくんとの面談がちょっと長引いちゃいました」

「遅れるんだったら一報入れると、いつも言っているだろ」

厳しい口調で叱責してくる氷川に、聡美は頭を下げた。

「すみません……」

「まあまあ、進」萬福院がフォローを入れてくれた。「相変わらずお前は細かいな。ちょっとくらい良いじゃないか。聡美ちゃんもいろいろ仕事があるんだから」

しかし、氷川は学生来の旧友にも容赦が無かった。

「些細なことでも確実にこなすのが仕事だろ。小さなミスが

とんでもない事故に繋がることもあるからな。警備課のお前の方がよくわかっているだろう」

「まあ、そうだけだよ……」萬福院は返す言葉が浮かばないようで、押し黙ってしまった。

「それに……」氷川の視線が再び聡美に向けられる。「連絡がなかったら、事故にでもあったんじゃないかって、心配するだろう」

その一言に聡美の胸がドキリと跳ね上がった。——何このギャップ！　こういうところがあるから、たとえ厳しくても先輩のことが嫌いにはなれない。

「以後、気をつけます」聡美は素直に謝った。

「それはそれとして……」幾分落ち着いた声で氷川は萬福院に言った。「正勝、警備の方は大丈夫なのか？」

「世紀の大怪盗だって裸足で逃げ出すこと請け合ひさ。進こそ、我が『知恵の化身』様のご様子はどうなんだ？」

「大変くつろいでいらつしやるよ」

言葉だけとれば茶化しているようなやり取りだが、二人の表情はいたって真面目だった。聡美にも彼らの緊張感が伝わってくる。本当は時間があれば、カルロスの悩みについて氷川に相談したかったが、今はそんなことができる雰囲気では

なさそうだ。

萬福院ともう一言二言言葉を交わしたあと、氷川は聡美に向かって言った。

「由良もクライアントに挨拶をして来い」

「はいっ？」突然のことに、聡美の口から三オクターブほど高い声が漏れてしまった。「わたしがですか？」

「短い時間とはいえ、もてなすんだから当然だろ。それに、名前を覚えてもらうのは後々のことを考えれば悪いことじゃない」

こんな物々しい警備を要する人物に面と向かって会うなんて、正直気は進まなかったが、これも仕事だと言われてしまえば従わざるをえなかった。

聡美は氷川の後に続いて、『知恵の化身』が御座します部屋に入った。そこは超がつくほどの豪華スイートルームで、一泊幾らするのだろうか？　と考える気すら失わせるほどだった。室内にはクライアントがくつろげるように警備員は一人もおらず、入り口が閉まると廊下の喧騒も完全にシャットアウトされ、無響室のように静かだった。

玄関と前室を通り抜けた先、聡美の家の居間より数倍広いリビングルームの中央、据え付けられた肉厚のソファーに一

人の老人が座っていた。長い白髪と白髭、そして純白のローブに身を包んでいる。見るからに徳が高そうで、何者をもひれ伏さずにはいられない後光が発せられているかのようだ。

なるほど、これは只者ではないと聡美は悟った。全異世界の生き字引であり真理を得た存在、『知恵の化身』に相応しい貫禄だ。

そう思った次の瞬間、足元から脳天へ向けて緊張が一気に駆け上がってきた。聡美の両足は震え、心臓は激しく跳ね上がり、息をするのも苦しくなってきた。

「由良」「聡美ちゃん」

背後から氷川と萬福院が急かしてきた。聡美はカーペットの端に足を取られてずっこけそうになるのをなんとかこらえて、老人に近づくと、腰を百八十度に折った。

「ゆ、ゆ、ゆ、由良、さ、さ、さ、さ、聡美と、も、も、申します。『知恵の化身』と称される貴殿のお世話をさ、させていただくことを、こ、光栄に思います。み、み、短い間ですが、よ、よろしくお願ひ、致します、ます」

何度も舌を噛みながら、まくし立てるように言い切ると、

聡美は腰を曲げたまま、上目遣いで老人の様子を見た。

彼は呆然とした様子で聡美の頭部を見つめていた。

何か変なこと言ってしまっただろうか？ 不安が聡美の全身を襲ったその時、「おい」と氷川の声があった。

「な、何ですか。先輩？」聡美は後ろを振り返った。

「お前は、誰に話しかけてるんだ？」

「誰って、『知恵の化身』様に決まってるじゃないですか」氷川の眉間に何重もの深い皺が現れた。それを見て聡美は

確実に何かやらかしてしまったことに気づいた。しかし何を失敗したのだろうか？

すると老人は、音も立てずにソファから立ち上がると、混乱する聡美をよそに、奥の部屋へ姿を消してしまった。怒って立ち去ってしまったのだろうか？ と、聡美が思った時、老人が座っていたソファに、床から何かが飛び乗った。

氷川はゴホンと咳払いすると、おもむろに言った。

「こちらが今回のクライアントだ」

「……嘘でしょ」聡美は目を疑った。

そこには、美しい灰色の毛並みを持つ一匹の猫がいた。

5

顔を真っ赤にして前室に戻ってきた聡美は、氷川と萬福院

に向かつて強く抗議した。

「最初に教えてくださいよ。『知恵の化身』が人じゃないなんて、わかるわけない」

苦笑いを浮かべる萬福院の横で、氷川は一言で切り捨てた。「事前に渡した資料に全部書いてあるだろ。読まないお前が悪い」

「……」

痛いところを突かれ、聡美はぐうの音も出なかった。

半分開いたドアの隙間から聡美はリビングを覗いた。『知恵の化身』は奥の部屋からスポーツ新聞を持ってきた白いロープの老人の横で（彼は『知恵の化身』の従者だという。何が威圧感だ……）、ペロペロと熱心に毛づくろいをしている。——あの猫があらゆる知識を得て、世界の真理にたどり着いたって？ 本当に？

氷川が言った。「お前、疑ってるのか？」

「えっ、えっと……その……」聡美は顔を拭き始めた『知恵の化身』を一瞥してから答えた。「だって……猫ですよ」

「その疑問はわかるよ。僕も普通の猫にしか見えない」と、萬福院。

「だが事実だ」一方、氷川はいたって真面目な口調で答えた。

「現にあの方は、世界中の名だたる宗教の指導者や哲学の専門家たちと対談されてこられたし、それにこれから、このホテルの会議場で日本の宗教家や政治家たちに向けて講演を行うんだからな」

「講演って……信じられない」

聡美はリビングへ再び視線を向けた。すると、『知恵の化身』は前足を舐める舌をピタリと止め、顔を上げた。聡美と目が合う。きらりと光る瞳に、なんだか心を読まれているような気がして、咄嗟に目を逸らした。

氷川は言った。「この仕事をしていく以上、俺たちの常識じゃはかり知れないものも多い、ってことを受け入れる必要がある」

「先輩の言うことはわかります。異世界は広い、ってことでしょ」

「そういうことだ」

「異世界って、何のことです？」

突然、入り口から聞き慣れない声がして、聡美は心臓が口から出てきそうになるほど驚いた。

振り返ると、玄関前に台車を引いたホテルの従業員が立っていた。

——もしかして今の会話、聞かれた!

頭が真っ白になった聡美の横から、氷川が従業員に訊ねた。

「ど、どうしました?」さすがの氷川も声が緊張していた。

二人の様子とは対照的に、従業員は気の抜けた声で答えた。

「ルームサービスで、刺身の盛り合わせとタピオカミルクティーをお持ちしたんですけど」

「ルームサービス……。そうか、ありがとう。料理は俺が届けておく」

そう言って、台車から料理の皿を受け取ろうとした氷川を、若い従業員はまじまじと見つめた。

「それより、さっきお二人で異世界って言ってましたよね」

氷川の口から小さく舌打ちが聞こえた。

「そんなことは言っていない、気のせいだよ」

「いいえ、聞こえました。何の話ですか? 僕もラノベが大好きで、異世界って言葉は気になっちゃうんですよね」それから、従業員は声を潜めて言った。「もしかしてこの超ものものしい警備も異世界と何か関係があるんですか?」

なんて想像力のたくましい青年だろう、そしてその勘は見事に的中している。

「やれやれ、しょうがないな」

それまでずっと前室の隅で、黙って聡美たちの様子を見ていた萬福院が動き出した。

「おい、その君」

萬福院が従業員の肩を掴んだ。物陰から突然現れた大男に睨まれて、従業員は全身をブルリと震わせた。

顔中から汗が流れる従業員の肩を掴んだまま、萬福院はジヤケットの胸ポケットから紐が結ばれた五円玉を取り出した。「こいつをよく見てろ」

萬福院は、コクコクと鳩時計のように何度も首を縦に振る従業員の目の前で、紐の端を持って五円玉をゆつくりと振り始めた。すぐに従業員の臉が下がり始めた。そして臉が完全に閉じられる直前、萬福院は従業員の肩をパンツと叩いた。

目をパチリと開けた従業員はキョロキョロとあたりを見渡し始めた。「あれ、僕どうしてここに?」

氷川が一步前に出て落ち着いた声で言った。

「ルームサービスを持ってきてくれたんだろ。ありがとう」

「あつ、そうでした。どうぞ」

従業員は刺身の盛り合わせとタピオカミルクティーを氷川に差し出すと、すぐに部屋を出ていった。

さっきまでの興味は何処へやら、まるで異世界のことなど

忘れてしまったかのようなのだ。事実、あの従業員は忘れてしまったのだ、萬福院の催眠術によって。

「萬福院さん。今ので記憶消しちゃうんですか？」

「しようがない。些細なことからボロが出る可能性があるから。それを摘み取るのが僕の仕事だよ」

「あんまり、いい気分じゃないですよ。これ……」

異世界は厳守すべき機密事項であり些細な情報も関係者外へ漏らしてはならない。そのためにイカモテ局は様々な手を打っているが、それでも完全に防ぐことは難しい。そこで、万が一漏洩してしまった場合の緊急手段として、局員には対象者への強制的な忘却、つまり記憶改ざんが許されている。改ざんと言ってもピンキリで、異世界の話を小耳に挟んでしまった程度ならば、先ほど萬福院が行ったような軽い催眠術で十分だ。しかし、記憶に深く刻まれてしまうようなことが起こったら、異世界から供与された『普通じゃない技術』の力も借りて、後遺症が残りにかねない大掛かりな改ざんが必要になる場合もある。できれば行使したくないものだ。

「そう思うなら、自分の言動に気をつけろ」

と水川は言うのと、ルームサービスを持ってリビングへ行ってしまった。

6

タピオカを一粒残らず食べ尽くした白ローブの老人は、大トロがたっぷり盛られた刺身をペロリと平らげた『知恵の化身』を赤子のように抱えて、超高級スイートルームを出た。聡美と水川、それに萬福院があとに続く。

これからホテルの会議場にて、日本の著名宗教家や政治家たちに向けて『知恵の化身』様が御講演なされるという。

廊下の壁際に沿ってずらりと並んだ警備員たちが、白ローブの老人の姿を目で追っている。聡美はそんな警備員たちを横目で見ながら、彼らは『知恵の化身』とその一行が練り歩く様をどういう気持ちで見守っているのだろうか、と思った。異世界について何も知らない彼らは、護衛対象がいかにも神々しい出で立ちで威風堂々と歩く白ローブの老人ではなく、彼に抱えられた猫だとはかけらも思っていないだろう。世界の仕組みを彼らより知っていることについて、さつき自分も間違えたことは棚に上げて、少しだけ得意な気分になった。

会議場に到着した。会場前の警備の指揮を執る萬福院と別れ、聡美と水川は『知恵の化身』と一緒に舞台袖へ移動した。どんな人たちが集まったのだろうと思っ、聡美は会場と舞

台袖を区切るカーテンの隙間から覗いた。五百名程度収容できる会場は満席で、顔ぶれもバラエティ豊かだった。人種も違えば衣装もバラバラ、紋付袴姿の政治家、袈裟を着たお坊さん、黒いローブを着てロザリオを首にかけたエクソシストみたいな人、ターバンを巻いた蛇を操っていそうな人……、世界中のありとあらゆる人々が集まっているのではないだろうか？ 当然、会場の人間は異世界の存在を認識している。

「自国での講演が聴けなくて、わざわざ日本に来た人もいるらしい」

と、氷川が聡美に教えてくれた。そこまでしてでも『知恵の化身』の言葉を聴きたいのか。講演といえば校長先生の長話しか思い浮かばない聡美にとっては理解の範囲外だ。

間もなく講演会が始まった。冒頭に、イカモチ局の人間を除けば、出席者の中でただ一人スーツを着て逆に浮いていた主催者の男性が、講演会の趣旨と、現在の社会において人文学が果たす役割に関する持論などを並々ならぬ情熱で語り尽くしたあと、いよいよ『知恵の化身』の紹介が始まった。

「我々の長年の粘り強い交渉が結実し、異世界で最も尊き存在であらせられる、『知恵の化身』様を遂にお招きすることができました。今宵は、世界と生命の真理について、『知恵

の化身』様のお言葉を頼りに、みなさんと考えていこうではありませんか！ では、大きな拍手でお迎えください！」

『知恵の化身』を大事に抱えた白ローブの老人は、聡美と氷川の目の前を通り過ぎ演壇へ向かった。すると、それまで会場の方々から絶え間なく聞こえていた雑談がピタリと止み、代わりにゲリラ豪雨の雨音のような拍手が沸き起こった。

老人が『知恵の化身』を演壇の上のせると、潮が退くように拍手は鳴り止み、真夜中のような静寂に包まれた。老人は設置されたマイクを猫の口元に調整し、演壇から離れていた。誰一人驚く者はいなかった。一人くらい腰を抜かさなただろうかと、密かに期待していた聡美は「なんだ、知っていたのか」と、自分にだけ聞こえるくらいの音量で呟いたつもりだが、「お前だけだよ」と、氷川に突っ込まれてしまった。一方『知恵の化身』は、聡美だったら逃げ出したくなるような五百人の強烈な視線が注がれる中、おもむろに自身の肉球を舐め始めた。マイクがその音を拾って、会議場中にべろべろくちやくちやくと舌と唾液と毛が触れ合う音が響き渡ったが、参加者は誰一人身じろぎもせず、真剣な表情で猫の仕草を追っていた。そんな毛づくろいタイムが二、三分ほど続いたのち、不意に『知恵の化身』が顔を上げた。

ゴクリ、と会場から唾を飲み込む音が聡美の耳に聞こえてきた。

『知恵の化身』の口がゆっくり開かれ、鋭い前歯が見えた。

気づけば聡美も『知恵の化身』の口元を注視していた。異世界中の全ての知識を手に入れたと言われる『知恵の化身』は、会場に参集した数多の偉人たちに向かって何を語るのだろうか？

そしてとうとう、『知恵の化身』は言葉を発した。

「……にゃお」

一時間近い講演が終了し、『知恵の化身』を抱いた老人のあとに続いて会場を退出した聡美は、氷川にこっそり訊ねた。「これって、コント番組の収録ですか？」

氷川は目を剥いた。「何を言っているんだ、お前は。そんなわけないだろ」

「じゃあどうして、猫がにゃーって鳴いていただけなのに、参加者はあんなに興奮してたんですか？」

講演の間、『知恵の化身』はずっと「にゃお」と「にゃー」としか鳴いていないのに、還暦を過ぎた立派な身なりの男女が鳴き声一つ一つに対して、「おおっ！」とどよめき、叫び、

最後は涙すら流していたのだ。聡美はこれまでの人生で会得してきた常識というものを本気で疑いたくなくなってきた。

「そうか……、由良にはそういう風にしか聞こえなかったのか」

「えっ？」

氷川がとても残念なものを見るような視線をこちらへ向けているのに気づいて、聡美は言葉を詰まらせた。

「彼らは……」氷川は未だ参加者たちの興奮冷めやらぬ会議室の扉を一瞥した。「『知恵の化身』の言葉の奥から、これまで人生をかけて探し求めていた世界の真実の一旦を読み取ることができたんだ。年甲斐もなく興奮する気持ちもわからないでもない」

「そっ、そうなんですか……。わたしだって神主の娘で、大学でも宗教学や哲学やら、一応は学びましたけど……。でもやっぱり猫の鳴き声にしか聞こえませんでしたよ。そこからどうやって世界の真理ってやつを読み取るんですか？」

しかし、氷川は黙ってワケありげに首を左右に振るだけだった。

なるほど、氷川の実家は聡美の父親の神社よりもずっと大きく霊験あらたかな神社で、管理課の誰よりも『普通じゃな

い技術」を上手く扱える素質も持っている。聡美には読み取れないことも、氷川が読み取れたとしても不思議ではない。

聡美は更に訊ねた。「じゃあ先輩は、さっきの講演からどんな真理が読み取れたんですか？」

「……」

氷川の唇がピタリと止まった。彼はすーっと息を大きく吸い、十秒ほどしてからようやく口を開いた。

「真理というのは、簡単に言葉で表すことはできないものだ。それに、人に教えてもらうものじゃなくて自分で悟るものだからな。おっと、置いていかれるぞ」

と言いつつ、氷川は距離があいてしまった老人たちの方へ早足で行ってしまった。

聡美ははっと顔を上げた。

——もしかして、はぐらかされた！

7

ともあれ、この世界での『知恵の化身』の仕事は無事終わった。超大物のエスコートということで、聡美は最初とても緊張したが、前任者によって警備も段取りも完璧に手配され

ていたので、仕事自体は楽なものだった。普段の仕事だったら、警備の段取り、目的地のアポ取り、移動手段の手配などなど、全部こなさなければならぬ。

残る仕事は、近くの神社へ行ってトリイを開き『知恵の化身』を異世界へ送り届けるだけだ。せっかく高級ホテルを用意したのだから一晩くらいゆっくり泊まっていけばいいのに、と聡美は思ったのだが、異世界中で大人気の『知恵の化身』は一分一秒も無駄にできない超過密スケジュールだという。

蟻一匹這い寄る隙もないほど無数の警備員が集まる一階ロビーに到着した。移動の車が到着するのを待っていると、聡美と氷川のところへ萬福院がやってきた。

「おつかれさん」

と言いつつ、二人にアイスの缶コーヒを差し出した。熱気むんむんの会議室に長らく閉じ込められていたので喉はカラカラだ。聡美はありがたく受け取り、一気に半分ほど飲み干した。

「無事に終わって何よりだね、聡美ちゃん」

「まだ終わりじゃない。気を抜くな」缶コーヒの蓋を開けながらも、氷川は厳しい声で言った。

「わかってるって、相変わらず厳しいな。……おっ、来た」

前庭の方から一台の大きな黒塗り高級車がやってきて、ホテルのエントランスに停まった。この自動車で『知恵の化身』と従者を人気のない近くの神社まで連れて行く。最後の最後まで超VIP仕様だ。

「んっ、到着が予定より早くないか？」腕時計を確認しながら氷川が言った。

「本当に細かいな、お前は。早く来てくれるぶんには良いだろ。さっ、二人とも、最後の仕事だ。空き缶は僕が捨てておくから」

萬福院に空き缶を渡して、聡美と氷川は少し離れたテーブルに座っていた『知恵の化身』と老人のところへ向かった。老人も猫を抱えて立ち上がり、二人のところへ近づいてきた。

「あのう、ちょっといいでしょうか？」

聡美は初めて老人の声を聞いた。

「どうされました？」と、氷川。

「手洗いに行きたくて」

「もちろん、構いません」

「ありがとうございます。それで、少しの間持っていますもらえませんか」

と言って老人は、両手で抱えた『知恵の化身』を氷川に差

し出してきた。氷川が腕を伸ばそうとしたが、途中で動きを止めた。

「しばし、お待ちを」

そう言つて、彼はジャケットの奥から携帯電話を取り出し、画面を確認すると、聡美を呼んだ。

「由良。課長から電話が来た。だから代わりに頼む」

「わかりました」

ようやく仕事らしい仕事が終わってきた。といっても猫を一匹抱えるだけなのだが。

聡美は白ローブの老人から『知恵の化身』を受け取り、氷川は老人に「案内します」と言つて、電話を耳に当てつつ、二人でロビーの奥へ向かっていった。

聡美は『知恵の化身』と一緒に外へ出た。ホテルの従業員が素早く駆け寄つてきて、黒塗り自動車の後部座席の扉を開けてくれた。『知恵の化身』を車の中に入れようと腰を曲げた時、それまで大人しかった『知恵の化身』が、ごそごそと動き始めた。

「急にどうしたんですか？」

聡美の腕の中で、片方の前足を横へ真っ直ぐ伸ばした『知恵の化身』と目が合った。猫は「にゃあ」と鳴いた。その瞬

間、聡美は心臓を撃ち抜かれた。

——可愛い……。

「どうしたの？ もうお腹が空いたのにかや？」

相手がクライアント——異世界中で最も敬われている存在だということも忘れて、ついつい猫語で反応してしまった。

すると猫は、伸ばした前足を上下に振りながら、「ふいや！」と、怒ったような鳴き声を上げた。おっと、見下されたと思ったのだろうか？ でも本能的に猫語になってしまうほどの可愛さなのだから、仕方ない。

猫はもう一度、「にゃあ」と鳴いた。

と同時に、強い力で誰かが聡美の肩を押してきた。

——えっ？

聡美は声を出す間も無く、『知恵の化身』を抱えたまま、黒塗りの自動車の後部座席に押し込められてしまった。

老人に付き添っていた氷川も、空き缶を片付けに行った萬福院も、その場には居らず、残りの警備員たちは、護衛対象だと思っている老人に注意を向けていたので、自動車の異変に気づくのに遅れた。

乱暴にドアが閉まる音がして、車は急発進した。

「ちよっと、なんなのこれ？」

状況が理解できないまま聡美は車内を見渡すと、すぐ横に先ほど自動車のドアを開けたホテルの従業員が座っていた。

「なんであなたが座ってるの？ どうして車が動いてるの？ 運転手さん、これどういうこと！」

大声で問いかけても、運転手は無言で、交通量の少なくなつた広い道路を、法定速度を超えて乱暴に走らせていた。

「何考えてるの、わたしたちを降ろしてよ」

「びいびいうるせえな」

隣の従業員が制服のジャケットの奥から取り出した黒い物を目にして、聡美は頭の中が真っ白になった。

「黙ってる、さもなきや頭を吹き飛ばすぞ」

聡美の眉間に銃口が突きつけられた。

異世界おもてなし局、ひいては政府の異世界に対するスタンスは、自国の安全に影響を及ぼさない限りにおいて共存共栄を目指す、だ。これは他の多くの異世界においても同様だが、異世界の存在を知る者の中には、僅かながらもこれに異を唱える集団がある。異世界征服主義や異世界排斥主義など、

反異世界派と呼ばれる面々だ。その中でも一部の過激な連中がテロリストまがいな行為に走ることもある。

「どうやら、聡美と『知恵の化身』をさらったホテルの従業員と運転手は、そんな反異世界過激集団の一派のようだ。」

車で散々連れまわされたのち、聡美と『知恵の化身』は今、都心から離れ、周りを畑に囲まれた廃工場の奥に監禁されていた。聡美は両手両足を縄で縛られた状態で冷たいコンクリート床に座らされ、『知恵の化身』も、猫一匹がようやくやく入るくらいの小さな檻に押し込められている。

聡美は自動車の中では相当パニックに陥ったものの、大分落ち着きを取り戻していた。イカモテ局の管理官になった時から危険は承知の上だし、サイババル術の講習も一通り受けている。その成果を活かす時が来たのだ！——本当は来て欲しくなかったけど。

管理官としての最優先事項はクライアントを護ることだ。

「大丈夫、きつと助かるから」

聡美は『知恵の化身』が閉じ込められた檻に向かって声をかけた。猫は檻から脱出しようとしているのか、隙間から前足を出して上下左右に振っていたが、南京錠のかかった扉は開きそうになかった。

聡美は少しでも猫を安心させてあげようと、縛られた両足とお尻を交互に持ち上げ、よいしょ、よいしょ、と檻へ近づこうと試みた。しかし数歩進んだところで、前方から男の怒鳴り声が聞こえた。

「フリーズ！」

監禁部屋の入り口に、覆面を被りライフルを構えた大男が立っていた。聡美は直ちに動きを止めた。覆面の奥から「チツ」と舌打ちが聞こえたが、男は特に聡美に何かするでもなく、近くの椅子に腰を下ろした。

見張られている状況では下手に動けない、聡美は『知恵の化身』に近づくことは一旦諦めて、代わりに男の観察を始めた。聡美たちをさらった従業員や運転手とは別人だ。それにさっきの声から推測するに、日本人ですらない。連中は大きな国際的組織なのかもしれない。

聡美は考える。——わたしはおまけとしても、どうして連中は『知恵の化身』をさらったのだろうか？ 強引にでも手に入れたい物や情報があるのだろうか？ 「にゃお」って鳴くだけなのにな？ それにしても、周りが騒がしくなってきたよな？ もしかして誘拐犯の仲間が次々と集まってきているの？ だとしたらテロどころか戦争でも起こしかねない数だ。

不意に、聡美たちを見張っていた覆面男が背中を向けると、部屋の廃品の中に紛れていたテレビの電源を入れた。

画面に男女のアナウンサーの姿が映し出された。

男性アナウンサーは緊迫した声で原稿を読み上げていた。

『繰り返し、速報でお伝えいたします。先ほど都内のホテルにて誘拐事件が発生しました。被害者は外務省関連の団体に勤める二十代女性。複数人による犯行と思われるようです』

聡美はテレビ画面を凝視した。——これって、もしかしてわたしのこと！

『今、新しい情報が入りました。犯人グループは犯行声明を出し、その中で政府に対して人質解放の条件として、逃走用の飛行機と、身代金五……』アナウンサーが目を丸くして原稿を二度見した。『身代金五千億円を要求しています！』

「ごっ、五千億円！」

聡美は思わず叫んでしまった。覆面男が聡美を見て「シヤラップ」と叫んだので、聡美は慌てて俯いた。

——どれだけ吹っかけてきているの！ そんなの絶対払えるわけがない。しがな神社の神主に過ぎない父親じゃあとても用意できないし、伊勢崎だって、たとえ身代金が百円であつても、経費予算にないと言って、首を縦に振らないよう

な冷酷上司だ。

ここで聡美ははたと気づいた。この身代金は当然、『知恵の化身』に対するものだ。しかし、異世界の存在たる『知恵の化身』を一般人も見ているニュースで流すわけにもいかず、結果として聡美の身代金が五千億円ということになってしまったのだろう。とはいえ、いくら全知の生物であり全異世界の至宝と讃えられようが、所詮は猫。そんな金額払えるわけがない。

『政府はこの交渉に応じるのでしょうか？』女性アナウンサーが聡美と同じ疑問を口にした。

『政府は基本的に、この手の交渉に応じることはありません……。おっと、ここで更に新しい情報が入ってきました。官房長官は緊急の記者会見で、今回の事件に関しては超法規的処置により身代金の準備を進める、と発表しました』

「マジか……」

聡美は、今度は見張りに聞こえない程度の小声で呟いた。それほどまでに政府は、『知恵の化身』にもしものことが起こった場合に発生する、異世界間のいざこざを重く受け止めているということだ。聡美は恐ろしいものを見るような目で、檻の中の猫を見つめた。

『さて、犯人グループが立て籠もる現場と中継が繋がっています』

テレビ画面が切り替わった。今度は上空からの映像で、廃工場の周りを機動隊が何重にも取り囲んでいた。

全方位から聞こえる無数の足音、それに時折窓から差し込む眩しい明かり……これは機動隊のもののようなのだ。

テレビの画面がズームインしていき、集団の中にいる男たちを映し出した。拡声器を手にした坊主頭で大柄の男と、ひよろりと背の高いメガネ男子……、萬福院と氷川だ。イカモテ局には機動隊や自衛隊を瞬時に動かせるだけの権限がある、それをフル活用したのだろう。

萬福院が拡声器を通して、ドスの効いた声で叫んだ。

『犯人グループに告ぐ、お前たちは完全に包囲されている。大人しく人質を解放しろ！』

遠くからテレビと同じ声が聞こえてきた。テレビ画面だけだと遠い国の出来事かと錯覚しそうだが、これは本当にすぐ目の前で起こっているのだ。聡美の緊張も高まってきた。

テレビの画面は再びアナウンサーに切り替わった。

『機動隊による突入の可能性はあるのでしょうか？』という女性アナウンサーの問いに対して、男性アナウンサーは、

『五分五分といったところじゃないでしょうか』と答えている。た。

聡美は、突入はない、と推測した。上層部は『知恵の化身』を巻き込む危険を犯したくないはずだ。

——じゃあ、身代金さえ支払われれば、わたしと『知恵の化身』は無事に解放されるのだろうか？

でも相手はテロリスト、正直期待はできない。万が一、『知恵の化身』が殺されて、異世界中から非難轟々、責任追及という名目で紛争に巻き込まれる展開は御免こうむりたいし、何より聡美はまだ自分は死にたくないと思っている。

氷川や萬福院が助けしてくれることを待っているだけじゃダメだ、やっぱりこの状況を打破する方法を考えないと。

……でもどうやって？ 両手両足は縛られているし、見張りの男も今は聡美たちに背を向けてテレビに釘付けではあるものの、ライフルは腕に抱えたまま。ここから脱出することなど不可能だ。

「にゃお」

『知恵の化身』の鳴き声があった。見張りの男は一瞬だけ猫を見たが、すぐにテレビへ視線を戻した。

聡美は『知恵の化身』に向かって囁いた。

「わかってる。必ず助けてあげるから」

と言ったものの、どうすれば良いものやら……。

「にゃお、にゃお」再び猫が鳴いた。

「騒がしくしないで、見張りを怒らせるよ」

ところが見張りは鳴き声などもう気にしていないようで、汗を拭きながら質問に答える官房長官が映ったテレビから目を離さなかった。

「にゃお」

猫が三度鳴いた。聡美はふと疑問が浮かんだ。ホテルのスイートルームでも、連れ去られる車の中でもずっと静かだったのに、どうして急に騒ぎ始めたのだろうか？

『知恵の化身』の鳴き声を聞いたのは講演会を除けば、エントランスでさらわれる直前だけ……。

——まさか……。

エントランスで鳴いたのは聡美に危機を知らせたかったのでは？ ただの猫なのにそんな芸当が？ いや、目の前の猫は選層を越えた人生の先輩方が涙を流して讃える『知恵の化身』なのだ。

この絶望的な状況、猫の手も借りたい……いや、猫の知恵も借りたい。

聡美は『知恵の化身』に問いかけた。「もしかして、ここから脱出する良い方法があるんですか？」

「にゃお」

「にゃお、じゃわからないです。わたしはあなたの講演が理解できるような知識なんて持っていませんから」

すると檻の中の猫は前足を曲げ、上下に動かし始めた。その姿に聡美は招き猫を連想した。

「もしかして、近づけてこと？」

「にゃお」

聡美は見張りに気づかれぬようにゆっくりとお尻と足を使って檻の前まで近づいた。今度は成功した。

「次は？」

『知恵の化身』は前足の爪を立てると、素早く動かした。

「なるほど、そういうこと」

聡美は縄で縛られた両手を差し出した。『知恵の化身』は鋭い爪を縄に突き刺すと、一気に引き裂いた。聡美の戒めが解かれた！

「やった」

聡美は自由になった両手を使って足を縛る縄も解いた。あとは檻ごと持って逃げれば良いだけだ。だんだんと猫の言葉

がわかってきたかもしれない。

しかし、檻を持とうとしたら、『知恵の化身』は「ふにゃ」と、不機嫌そうな鳴き声を上げた。

「えっ、違うの?」

確かに、ここから逃げれば当然見張りの男に見つかってしまう。銃を持った相手と戦って勝てるとは思えない。

すると『知恵の化身』は再び前足を出して、今度は檻の入り口を閉じている南京錠をベタベタと触り始めた。

「錠を開けるってこと?」

「にゃお」

聡美は監禁部屋を見渡すと、見張りが座る椅子のすぐ後ろにあるダンボールの上に、南京錠の錠を発見した。幸い、覆面男は廃工場を何重にも取り囲んだ機動隊を映したテレビ画面にすっかり夢中だ。聡美は物音を立てないようゆっくり見張りの背後へ近づき、そっと錠を持ち上げた。すると突然、見張りの頭部がピクリと動いた。聡美はその場で硬直し、息を止めた。

心臓が激しく脈打ち、額から汗がとめどもなく流れていく。しかし見張りは、ほんの少し首を曲げ、覆面の上からポリポリと後頭部を搔いただけで、すぐにテレビへ注意を戻した。

聡美はホッと息を吐くと、抜き足差し足忍び足で『知恵の化身』のところまで戻ってきた。

「ちょっと待っててくださいね」

聡美は音を立てないよう慎重に南京錠を開けた。『知恵の化身』は静かに檻から抜け出した。

「で、これからどうするんですか?」

聡美が期待を込めて問うと、『知恵の化身』は回れ右して細長い尻尾を見せると、その場で大きく跳躍した。

「えっ?」

『知恵の化身』は壁の真ん中あたりに据え付けられた排気口に跳び移っていた。それは猫一匹通り抜けるのがやつとの大きさで、とても人が通れるものではなかった。

「もしかして……。ちょ、ちよっと、待って」

しかし『知恵の化身』は啞然とする聡美の顔を一瞥しただけで、再び尻尾を見せ、通気口の奥に消えてしまった。

——一匹だけ、逃げた!

「それはないでしょ! この薄情猫!」聡美は自分が監禁中だということも忘れて、通気口に向かって大声で怒鳴りつけた。「わたしはどうやって、逃げればいいの!」

「へい、ユー!」

聡美の背後から怒号が飛んできた。見張りが英語でまくし立てながらライフルを構えて近づいてくる。聡美は反射的に両手を挙げた。

とても逃げられない。恐怖に耐えられず、聡美はぎゅっと両目を閉じた。

——こうなったのも全てあの猫のせいだ。死んだら化けて出てやる！

その時、壁の外から何かが破裂するような爆音がして、部屋全体が激しく揺れた。続いて、部屋の外から男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「カモン、カモン、ハリーアップ！」

「ホワッツ？」

覆面男は動転した様子で、部屋の外へ走り去っていった。

「た……助かったの？」

しかし、一体何が起こったのだろうか？ ふと、つけっぱなしのテレビへ視線を向けた。そこには絶叫する男性アナウンサーが映っていた。

『突入です、突入！ 機動隊が犯人グループの立て籠る廃工場に突入しました！』

アナウンサーの実況に交じって、テレビのスピーカと部屋

の奥から同時に、破裂音やら太鼓のような激しく叩く音やらが響いてきて、空気がビリビリと震えた。それから、部屋の出入り口の隙間から白い煙が噴き出してきた。

「うっ、嘘でしょ……。本当に突入したの！」

とにかく巻き込まれないように隠れないと！

聡美は近くのダンボールの中に身を潜めると、必死に両目、両耳を塞いだ。

結局、機動隊を指揮した氷川と萬福院により誘拐犯たちは全員逮捕され、聡美と『知恵の化身』は無事に保護された。

そのまま聡美はイカモテ局御用達の病院へ直行し検査入院、一方、聡美を置いて逃げた『知恵の化身』は騒ぎが大きくなる前に次なる異世界へ去っていった。

一時はどうなることかと思っただが、結果的に軽傷で済んで仕事も無事に果たせた。だから万々歳なのだけど……、納得がいかない。

聡美は機動隊に救出された直後、駆け寄ってきた氷川に対して開口一番、

「あの猫に、デコピン食らわせても良いですか？」

と訴えた。氷川は数回瞬きしたあと、

「そんな軽口が叩けるなら、大丈夫だな」

と言って、背を向けようとしたので、聡美は慌てて呼び止めた。

「待ってください、先輩。わたし本気で怒ってるんですから。あの薄情猫はわたしを置いて一匹で逃げ出したんですよ。制裁を下してやらないと」

「何を言っているんだ、お前は。そんなことしたら由良が異世界中から命を狙われることになるぞ。そもそもあの方が逃げたのは、お前を助けるためでもあったんだ」

「えっ？ どういうことですか？」

「俺たちが工場に突入できたのは、『知恵の化身』の保護に成功したからだ。あの方を人質に取られている限り手出しできなかつたからな。だから『知恵の化身』のことは恨むな」

「なるほど」と納得しかけた聡美は、もう一つ重要なことを思い出して、慌てて頭を振った。「って、ちょ、ちょっと待ってください。だとしてもいきなり突入はないんじゃないですか。銃撃戦に巻き込まれていたかもしれないんですよ。わたしのことはどうでも良かったんですか？」

「そんなわけないだろ！」

氷川の怒鳴り声に、聡美は息を呑んだ。

「……っ先輩？」

すると氷川は軽く咳払いしたあと、一転して、落ち着いた声で続けた。

「お前なら大丈夫だと信じてたよ。それに、事件解決は由良が体を張って『知恵の化身』を逃がしてくれたからだ。よくやったな」

そんなことを言われてしまったら、もう文句は口にできなかった。

異世界おもてなし局の管理官は、縁もゆかりもないクライアントのために時には命をも投げ出さなければならぬ、良く言えば博愛精神、身も蓋もなく言えば理不尽な仕事だ。それでも頑張ろう、と聡美は思った。